

# ミオヤの光

## 讚頌の巻

安心	一	釋尊の本懐	一八
一心十界	二	聖意の現はれ	一九
聖き皇統	三	佛々相念の讚	二〇
おみななのり	四	佛智の靈園	二三
禮拜の範	五	三身聖歌	二五
不死の忠魂	六	一心十界の頌	三六
念佛將軍	七		
感謝の歌	九		
法蔵菩薩發願の偈	二		
四誓の偈	四		
靈鷲の月	一六		
靈山浄土	一七		

## 安心

教祖釋尊此世に出で給ひて宗教の眞理を教へ給へり。宗教とは宇宙に絶對的に尊き靈格が存在して之に歸命信賴する衆生を攝め取りて永遠の靈福を與へ給ふの教なり。即ち經に無量壽如來の威神光明最尊第一にして諸佛の光明よく及ばざる所の故に如來には無量光等の十二の尤名ましませり若し人ありて斯の靈光に觸るゝ者は心の垢は消滅し身と意と共に柔軟に圓滿に歡喜と平和とに充たされ聖き善き心生ぜんと言き給へり、實に彌陀は靈界の太陽なり例へば太陽の光に由りて地上の生物が化育する如くに如來の光明に依つて衆生の心意は靈化せらる。然して衆生が如來の聖意に應はしめんと欲せば至心に如來を信愛し靈國に生れんと欲して一心に念佛すべし。然る時は衆生の佛性の卵は如來の慈光に孵化せられ生死の凡夫は永生の佛子と更はり闇黒より出て、光明の生活と成らん。されば經に若し念佛する者は人中の白蓮華觀音勢至は其勝

友と爲り當に成佛すべき諸佛の家に生れたりと讚めたまへり。

## 一心十界

心具十界とて衆生の心に十界の性を悉く具有てをる。开が各自の生涯の業に由つて十界の中の何れかを造り出すものとす。經に心は巧なる畫師の如くに鬼をも佛をも造り出すと示し玉へり。各自に十界の性を有つてをる故縁に觸るれば鬼の如き恐ろしき心を起こす是地獄の性にて慳貪嫉妬は餓鬼の基、愚痴橫着は畜生の因、虛榮驕慢は修羅の心、仁義禮智は人間の性、慈善公德の分あるは天上の性、又た眞理を聞けば悟りたいと思ふは聲聞の性、生死を諦めたいと思ふは緣覺の分である、平生無佛論者が絶待の場合に自から稱名の發するは是れ佛性あればなり。而して永く闇黒の獄火に燒かるゝも永遠の光明界に登るも心一つの向け様による。俗諸賢よ君の心意は十界の中に何れを造りつゝあるかを自ら反照し玉へ、可惜人生の曖昧の中に葬ひる如き愚に倣ひ玉ひそ、佛教は衆生本具の佛性を開きて永遠の生命と圓滿なる聖き人とに爲すにあり

## 聖き皇統

朝日かやく日の本の  
 紹かせ王へる一糸の  
 畏き代々は民草を  
 聖なる世々は三寶を  
 中にも聖武の帝より  
 三十八主の天皇には  
 また歴代に亘りては  
 身を法體に改ためて  
 凡そ世界は廣くして  
 吾皇の代々ばかり

天津日嗣の萬代に  
 代々の天皇尊としな  
 子として愛撫し玉へり  
 法とし歸依し玉ひける  
 靈元帝に至るまで  
 落髮受戒し給へり  
 三百に餘れる王子等が  
 正法を護持し玉へり  
 國てふ國は多けれど  
 めでたき世々は亦あらし

おみなご模

いともの畏ごき皇の  
 國つ萬の民草に  
 ひとり古今に英でにし  
 光明後の聖徳を  
 聖武の帝を助けては  
 悲田施薬の院を立て  
 大佛殿を始とし  
 深くも佛法興隆に  
 自ら誓ひて千人の  
 清き心の兆しとて  
 后は一時清水に  
 宛然活ける観音の  
 貴き賤きをなべて  
 徳あれかしと賢くも

代々の國母の慈悲の露  
 かへらぬ里こそなかりけれ  
 慈悲の權化と崇めらる  
 末の世までも照すなり  
 公私の二徳を布まして  
 天下の無怙を慙れみぬ  
 佛堂伽藍を建立し  
 力を竭し玉ひけり  
 病者を洗ふ浴室に  
 阿閃如來を感見す  
 自ら玉姿を寫せしに  
 慈悲の姿と現れぬ  
 佛を信する女らは  
 範を垂させ玉ふなり

禮拜の範

あふぎぬかづく大宰府の  
 道實公は母ぎみの  
 汝が五のとしのおり  
 危きいのちを觀音の  
 御恩のほどな忘れそと  
 終身むねにおさめては

神とまつらる菅原の  
 いまはのときの示しなる  
 重き病におかされて  
 大悲の力に救はれし  
 こゝろこもれる遺言を  
 つねに恭敬したまへり

三世諸佛を拜禮し  
 または聖經寫すなど  
 斯も信仰深かりし  
 たうとき神とあがめては

不死の忠魂

あゝ忠臣と後の世に  
 今尙つきぬ橋の  
 信仰ふかき母ぎみが  
 拜むと夢見てやどりしに  
 朝臣は三徳兼備へ  
 君に献げし命をば  
 一度死して七度は  
 衛り奉らむ忠魂は  
 君に倣ひてわれくは  
 至誠の魂とこしへに

五百の僧に供養なし  
 種々の功德をつもりけり  
 みたまにませば今もなほ  
 伏し拜むなり諸ひとが

譽を流す湊川  
 正成朝臣の生たちは  
 志貴の山なる多門天  
 多門丸とは名つけらる  
 忠誠古今に比なし  
 湊川原に消ぬれど  
 生れかわりて玉門を  
 いまにも活るいくさがみ  
 たとひ此身は盡るとも  
 死なぬつとめを勵まなん

念佛將軍

三百餘年太平の  
 家康公は若き時  
 討死ときのおれをも  
 大樹精舎に入ぬれば  
 諫と教へに隨ひて  
 此より運を開きけり

墓を開く徳川の  
 主と頼みし義元が  
 自害せむとて香花院  
 山主の登攀上人の  
 自殺をとてめ幡をあげ  
 其上人の示には



法藏菩薩發願の偈

願はくば我れ作佛せば  
生死の海を渡りては  
有ゆる善と波羅密の  
一切の恐懼の物のため  
假令無量のほとけあり  
斯も數多のみほとけに  
一切と共にわたるべき  
何なる苦難を凌ぎても  
たとへば數へ盡されぬ  
光明遍ねく照らしては  
斯くは志勇精進し  
我作佛せる國ばかり  
無量の寶奇妙にて  
無爲泥洹の國きよく  
我世の一切の衆生が  
恕ひやられて哀れなる  
十方より來生する人の  
我國にだに到りなば  
幸はくば我がみ佛よ  
衆生救度ふべき願望を  
十方世尊無礙の智よ  
假令此身をもろくの

一三

聖法王に齊しくし  
遍ねく度脱し盡さんん  
願行あまねく成就して  
大いに安きを施こさん  
其數恒沙に過ぎにける  
心つくせる供養より  
道をもとめて堅正に  
却ぞかざるに如ぬなり  
有ゆる諸佛の國々に  
洵らぬ限もなきまでに  
威神はかり難かるに  
最勝第一ならしめん  
道場ことに超絶し  
また等雙ぶる處なけん  
生死の海にしづむ身を  
争でか度は有ぬべき  
心は清よく安らけい  
快樂安穩ならしめん  
我真證を證明しませ  
果さ欲とて力精まなぬ  
我心行を知らしめせ  
猛き炎の中に入り

一三

四誓の偈

有ゆる苦毒を受るとも  
いよく勇猛精進し  
我は超世の願を建つ  
斯願若しも滿さずば  
我は無量劫のなか  
一切の貧苦を濟はずば  
我れ佛道を得るときは  
若も開えぬ處あらば  
離欲と正念淨慧との  
無上の道をもとめては  
神力大光を演まして  
三垢の冥を消除ては  
彼の智慧の眼を開ては  
諸ての惡道閉しては  
功祚成滿いたしては  
日月の光りも取まりて  
衆てに法藏開きては  
常に大衆の中にして  
一切の佛に供養ては  
願慧まどかに成滿し  
佛の無礙の智の如く  
願くは我功慧の力

衆生に代らん我行は  
忍びて終に悔ぬなり

必らず無上道を得ん  
誓ひて正覺と成ぬなり  
大なる施主の身とは爲  
誓ひて正覺と成ぬなり  
名聲あまねく洵らなん  
誓ひて正覺と成ぬなり  
一切梵行修めつゝ  
諸の天人師と爲らん  
普ねく無際の上を照し  
衆の厄難を濟はなん  
此昏盲の闇を消し  
善趣の門に通達なん  
威を十方に耀やかし  
天の光も隠れなん  
功德の寶を施こさん  
法を説て獅子吼せん  
衆の徳本具足なれ  
我れ三界の雄とならん  
通して照さぬ處もなく  
最勝尊にひとしくし

一四

一五

斯願若しも冠果せば  
虚空に充てる天人よ

靈鷲の月

滅後に我を戀したひ  
衆生既に信伏し  
一心佛を見まほしく  
時に我は衆僧らと  
即ち斯は語るなり  
唯方便の力にて  
餘國に在りて人々が  
我また彼らの中にして  
汝ら此を聞ずして  
我は衆ての衆生が  
爲に此身を現はさで  
一心に戀ひて慕ふれば

靈山淨土

我が神通の力にて  
常に靈鷲の山及よび  
衆生の劫は盡果て  
我此の土は安穩けく  
園林および堂閣は  
金の樹は花果多く

大千應さに感動し  
妙なる花を雨せかし

渴仰の心生じなん  
質直に意柔軟けく  
自から身命おしまねば  
俱に靈鷲の山に出で  
常に滅せず此に在り  
滅と不滅と現すなれ  
恭敬信樂する者は  
無上の法を説ぬべし  
但我滅度すとおもふ  
苦海に没在する故に  
渴仰心を生せしむ  
乃ち出でて法を説く

今より無央數劫に  
所餘の諸の住處にも  
大火に焼ると見る時も  
天人常に充滿し  
種々の寶に莊嚴し  
衆生の遊樂する處

諸天は天の鼓うち  
曼陀羅の花を雨ふらし

釋尊の本懷

如來無盡の大悲より  
釋迦牟尼佛と現はれて  
世の群萌を拯はんと  
正しく出世本懷の  
世尊大事の因縁は  
分子れし本具佛性を  
形氣に受たる煩惱を  
智徳を併へ備へては  
衆生無始く無明は  
彌陀の常に照す日の  
即ち菩薩の階位にて  
淨滿月は正覺の  
闇に迷ふは凡夫にて  
圓かに照して満ぬるは

聖意の現はれ

聖なる聖名を稱ては  
如來の無上恩寵を  
如來の神聖なる聖意  
如來の正義なる聖意

衆の伎樂を作しては  
佛と大衆に散すなり

三界の子を矜れみて  
光く道教を聞きまし  
餘の方便を聞きて  
彌陀の法を演たまふ  
衆生本有の法身より  
開きて清きに悟らしめ  
靈化し菩提の徳とはし  
眞の佛子と爲むが爲め  
恰かも開き月の如と  
映する影の缺盈は  
新月進みて十五なる  
佛位に登りし姿なり  
菩薩は分に光を得  
即ち佛陀の覺なり

聖意の現はれ仰ぐなり  
我らが感情に満しめよ  
我らが良心を照しませ  
我らが意志に現はれよ

至真にしていと聖き  
至善にしていと聖き  
至美にしていと聖き  
我をすべての同胞と

佛々相念の讚

本有常住法身の  
威神の光明永しへに  
無明に迷ふ子らが爲  
釋迦牟尼佛と現れて  
譬へば西に日は入も  
無量壽王の日光は  
釋尊出世の本懷を  
即ち卍尊は寂靜に  
本佛彌陀の靈光は  
爾時諸根悅豫し  
光き顔は巍々として  
影が表裏に暢る如と

同 二

如來清淨光 明は  
諸根は最も清らけく  
如來歡喜の光明は  
諸佛の常に住ませる

靈國をこゝに格れかし  
靈國をこゝに格れかし  
靈國をこゝに格れかし  
安き靈許に在らしめよ

無量光王大日輪  
十方世界を照しては  
方便不思議の力より  
如來の慈悲を示します  
光は月に映る如と  
牟尼滿月に輝やけり  
靈鷲の嘉會に示さんと  
彌陀三昧に入たまふ  
人佛牟尼に映らひて  
姿色も殊に清らけし  
譬へば明淨なる鏡  
威容の光極みなし

世尊の感覺に映るへば  
奇特なること極みなし  
世雄の聖情に融合し  
大我の中に安住す

二〇

如來智慧の光明は  
世間の闇を照しては  
如來不斷の光明は  
至高徳に在まして  
如來萬徳具備りて  
三輪完全の鑑とし  
人佛牟尼は一向に  
本佛彌陀の靈徳は  
入我入は神秘にて  
甚深不思議の感應は  
願はくは我同胞と  
念佛三昧を宗として

佛智の靈國

釋尊自から見給へる  
便も阿難に教へては  
時に彌陀無上尊  
光明 遍ねく十方の  
大小諸山一切の  
譬へば劫水彌滿して  
一切菩薩聖賢の  
彌陀光王の光明は  
彼の清淨の國土なる  
自然微妙の莊嚴は

世眼の智慧と現はれて  
如實に衆生を導びきぬ  
世英の聖意に實現し  
最勝道に住しける  
天尊の身に現じては  
衆生に軌を垂れ給ふ  
本佛彌陀を憶念し  
牟尼の身意に顯現す  
三密正に冥合し  
是れ斯教の秘奧なり  
世尊の範に隨順し  
光の中に生活さなん

佛智の境を明さんと  
阿彌陀世尊を禮せしむ  
萬徳圓滿し玉ひて  
諸佛の世界を照します  
物皆な同じ色となり  
渾澄澄汗たる如し  
光はすべて隱蔽し  
超然として顯かりき  
地より乃至虚空まで  
佛智不思議の所現なり

二二

二一

二三



われら衆生を恵みます  
明きひかりに新らしき  
われらが命を賜ひます  
我等は法身に受にける  
攝化のひかり被むりて

## 報身の讚

本有 法身 阿彌陀尊  
本覺眞如のみやこより  
一子の慈悲の割なくも  
何成る苦毒を受くとも  
無量の願行 成就して  
本迹不二なる 靈體を  
無量光土にましまして  
世界を照して 念佛の  
衆生 至心に 信樂し  
恩寵のひかりを蒙りて  
光に遇はゞ 罪も消え  
身心ともに 安らげく  
信心 眞に 得る人は  
聖旨に契ふ子となれば  
いよく命の終りには  
慈悲の面影觀まつりて

聖旨の程ぞたふとけれ  
糧と清けき 涙氣もて  
ミオヤの恩寵いと深し  
靈性 本自 具ふれば  
聖旨 契ふ子とならん

無明に迷ふ子らがため  
法藏菩薩の 迹を垂れ  
苦海の衆生を救はん  
忍んでつひに悔じとの  
即ち十劫覺と現り給ふ  
無碍光王と名づくなり  
光明 遍ねく 十方の  
衆生を攝取したまへり  
佛の慈悲を 念ずれば  
便はち信心なりぬべし  
歡喜はなく覺ほへて  
清きこゝろに蘇がへる  
有漏の依身は變らねど  
法子の天職を務むなり  
一切の障礙盡きはて  
聖き御もとに到るなり

二八

二九

清き啓示を 被むりて  
報佛不思議の 境なる  
雲にそびゆる 宮殿は  
瑠璃 寶石の 莊嚴の  
寶の池には 水澄みて  
七重のうゑきに網覆ひ  
寶の蓮華は地に満ちて  
ひかりに化佛現はれて  
阿彌陀 無量 光王尊  
相好圓滿 したまひて  
無數の菩薩は法の身に  
如來を繞りし 装ひは  
世尊大衆のなかにして  
清風寶樹を吹きぬれば  
あまつ乙女は雲を分け  
妙なる花をあめふらし

二

## 應身の讚

舍那圓滿の 阿彌陀尊  
八相應化の 迹を垂れ  
先づ出初めし雲居なる  
天地よろづの 民草に  
地に出てはカピラエの

こゝろの知見開くれば  
花藏世界はあらはるれ  
金 銀 摩尼 眞珠  
照り輝くこと極みなし  
金の砂は 照り徹ふる  
花と果は かゞやけり  
無量の色にひかりあり  
微妙の法を説きたまふ  
身色 金山王の 如と  
威神のひかり極みなし  
智慧と功德と備はりて  
雲の月を かこむごと  
妙法を説きて已るとき  
百千の樂を作すがごと  
天の伎樂をならしては  
佛と大衆にちらすなり

靈を忍土にわかちては  
釋迦牟尼佛と號けます  
兜史陀の内の宮居には  
めぐみの露を濕ほしぬ  
淨飯王を 父とはし

三〇

三一



時を選みてたましひを  
うづき八日の長閑さに  
降誕ます聖子の初躰は  
一切の善事遂ぐるてふ  
圓かにそなふる相好は  
學の園生にのぞみては  
技藝の林にあそびては  
四門の遊びに仇し世の  
人の倫とて 妹と春の  
最と陸まじき閨の門に  
上なき道の得ま欲しく  
乾陟馬王に御されては  
深山の雲を分け入りて  
みづから鬚髪を除ては  
千里の霞を踏みのぼり  
解脱の道を訊ひしかど  
尼連禰河のほとりなる  
具さに苦行を積りては  
こがねの流に浴みては  
献ぐる乳を受けまして  
伽耶の毘鉢羅の樹下に  
むすふ蹴蹴いかめしく  
天つ魔羅が吹きおこす

摩耶の母胎に降します  
ラビの園生の花のもと  
天と地とに 響きしと  
悉達を君とは名けらる  
梵仙阿私陀を感かし  
五明四吠陀の花をめ  
奥義の室に入るとかや  
常なき相をさとりては  
上なき位も避けたまひ  
契り染ける耶輸陀羅と  
王子の羅喉羅を擧かど  
ささらざり八日の 曉に  
ひそかに宮を出ましぬ  
たまの筋をぬきすてつ  
法の衣に 替へたまふ  
アラ、ウドラの仙人に  
意を得さで立ち去りぬ  
緑の草しくそのふにて  
六度の春を經にけらし  
サイナの女ナダバラが  
頓に氣力をよみがへし  
金剛座の こけむしろ  
三昧の床に曳きしめぬ  
百のいかづちむら雲も

ト調性 應身の讚

6-6	7 6 4	3-4	3-●	4-3	6-4	3-●	3 0 0
シヤ-ナ	エ-ン	マ-ン	ノ	ア-ミ	ダ	ソ-ン	
4 3 4	6-7	3-1	7-●	1 7 3	1-7	6-●	6 0 0
ミ-タ	マ-チ	コ	ニ	ウ-カ	チ	テ	ハ
7-7	7-7	1-7	6-●	7-6	4-6	3-●	3 0 0
ハ-ツ	ソ-オ	--ダ	ノ	ア-ド	チ	タ	レ
3-4	5-5	4-3	1-7	6 7 1	3-6	7-●	6 0 0
シヤ-カ	ム-ニ	ブ-ツ	ト-	ナ-ダ	ケ-マ	ス	

青天冨かに照りわたる  
臘月八日のあかつきに  
無明生死のゆめさめて  
佛陀のおしへは正覺の  
牟尼の法は 涅槃なる  
世を度ふこと五十年に  
應化の迹は狗尸那なる  
まことは久遠 實成の  
常恒に樂しき御國にて  
願はくは我が 同胞よ  
聖旨に仕ふ身と爲りて

月には障りあらざりし  
明星仄かに出るとき  
無上正覺を得たまへり  
無量の光をさとらしめ  
無量壽國にかへるなり  
三輪まどかの籠を垂れ  
鶴の林に かくれしも  
無量壽佛にましませば  
光明攝化のきはみなし  
恩寵のひかりに更生り  
安き御許にいたらなん

如來は唯一りの尊とき大ミオヤなれども私共の爲に  
三身に分れて御慈しみをたれ給ふて居ます  
法身は一切衆生をうみなす大本のミオヤにて天地萬  
物は其恵みと力とに依て行はれてをる  
報身は宇宙最高の處に在して、法身からうみなされ  
たる人が信心念佛するに對して恩寵の光を以て之を  
攝化し永遠の生命と爲して下さるミオヤにて  
應身は教のミオヤ即ち釋迦牟尼佛、ある、此三身を  
合して三身一如の大ミオヤと申上ます

一心十界の頌

ハ調

5 6 6 6	6 1̣ 6 5	6 1̣ 2̣ 6	5 4 — 0
あめつち	よろづの	ものはみ	な
5 5 2 2	5 5 6 1̣ 6	4 4 5 — 2	2 — 0
ほつしん	によら—い	ぞうせう	の

三六

一心十界の頌

一大精神

天地よろづの物はみな  
發現なりと識るときは

一心十界

たとへば巧な畫き師が  
六凡四聖とかはれども

地獄

地獄は倒に懸りてぞ  
人道に逆ひ理に戻り

餓鬼

たけき炎に焦るゝは  
殘酷非道の報ひとや

ひとつ心や造るなれ  
さまくすがたを繪す如く

法身如來藏性の  
人の心性根底ぞ深し

三七

畜生

有財無財の餓鬼てふは  
たからと五慾を貪りて

形は人類に似たれども  
正なる人道を横さまに

修羅

おのれ慢ぶり他を威し  
天を畏れず世をなみし

人間

仁義禮智のみちありて  
義務は國家の目的にとて

天上

博く愛して人類の爲  
世に幸福を與ふるは

聲聞

小聖は四諦の理を觀じ  
神通自づと具はりて

緣覺

獨りしづかに座を占て  
無明生死の夢さめて

菩薩

ぼさつは誓の海ふかく  
一切衆生を我身とす

佛陀

菩提を求め衆生を度し  
同體大悲の極みなれ

因縁無生の理をとり  
緣覺涅槃に入ぬらめ

無我は宇宙を身となせば  
無爲の都に栖あそぶ

我を犠牲に獻げてぞ  
國つ神かや天人か

社交は互ひに恕やり  
力を竭すは人なれや

僞善僞徳に名を銜ひ  
驕る阿修羅のかほにくし

情操は禽かは獸かは  
歩行衛はいづこそや

肉慾我慾の惡業症にて  
重き罪惡造るより

三八

三九

佛陀は三身まどかにて  
法身在在ぬ處もなく  
智慧やあまねく照しては  
八相應化のあと高し

勸 結

無明は六のやみぢなり  
九界にかゝる雲はれて  
佛法を外な求めぞよ  
宇宙一大真我なる  
如來の智光に無明さめて  
事相は内容かぎりなき  
斯る真理を得てよりは  
最終真理の目的に

覺醒れば一如の天清く  
本覺如來の日は明し  
己がこゝろの源の  
無量光壽に歸命せば  
天真自性は顯はるれ  
萬の功德は與へらる  
大我の中の我として  
參はり天職を力めかし

一心十界の頌の解説

一大精神 佛教にては宇宙實體は一大精神であると説く天地萬物統一綜合たる精神なれば總該萬有心と云ひ亦是は法身如來藏性とも稱します。世界萬物十界の身心は悉く此一大精神の發現である。此に全知全能の徳用あり天則秩序を整ふるは知の作用にて萬物を生活活動すは能の作用と云ます。宇宙の實體の方は如來の自體にて永恒不變の現象の方面は生滅轉變極なないのである。一大精神より發現れたる個々の精神を二に分て凡と聖とす凡は無明にて之を六凡とし聖は覺醒たる心靈にて四聖である。此十界は一大精神より現はれとすれば人の精神の根底は玄深のであります。

一心十界を造る 一大精神の分れたる個々の心は理に十界を具し事に十界を造ると申し十界とは地獄餓鬼畜生修羅人間天上の六道と聲聞緣覺菩薩佛陀の四聖とを併せたので人の心は十界何れにも成うべき性能を有て而して因縁の事情によりて善惡の十界

を造り出すことは喩は巧なる畫師が天人をも鬼をも自由に描き現はすやうなものである。一つ心が善惡に分るゝ因縁に就ては形と業識との両面がある先づ形の方から説明ませば無垢の本性が何して善惡に變化と云はゞ其本性が父母の素質の薰染を稟けた娘娠中の母の心の持方のいかゞに於ても其子の素性に關係を及ぼす。夫より出生後には少年の時の家庭學校社會の教育其他の周圍の事情は其人を善惡に醇化する資縁である。偕夫よりは最も其人々に責任の重きは一生の業作と善惡の習慣性とである其習慣性が鞏固して決定たるを業識と申し善惡六道と四聖と分るゝ其習慣性と業力の結果であります。カントが天國は理論には無とも有とも證明はできないが其實行の結果はな

くはならぬと云ふと同じく地獄や天堂は之を理論に證することは能はざるも人の生涯の善惡の業によりて固りたる性格や天賦の業力の自然は六道四聖なければならぬ否現に個々の情操と其行為は六道を瞭然と證明されてるではないか。さて此十界は凡と聖と善と惡と其相に於ては清濁相異なれりと雖ども其本一心の造る處と申します。

地獄 闇黒の中に於て其身は倒に懸り熾然な猛火に焚焼れ劇苦に間隙なきものは地獄と申す。何なる業力により斯る苦惱を感ずるとならば一類の人あり唯惡の方のみ發達し良心滅亡し惡の習慣性が惡弊症に陥り天理に逆ひ人道に戻り殘忍酷薄極惡の所作人をして戰しむ。上にありて般の村が己が肉の快樂の爲に民を塗炭に苦めしが如き下にありては盜跡が數多の人の幸福を一個の肉慾の犠牲とす斯の如きのすべて邪惡の習慣たる業識惡の業力が感ずる處を地獄と申します。

餓鬼 此に二種あり一に有財餓鬼とは眼前に食物あるも其喉小くして之を食すること能はず飢渴の苦の甚だしきものであると申す。世に我慾の病的に陥り山の如くに財を積めども之を公益に施すこと能はず我慾を充さんが爲に他に害を興へ我慾の餓鬼根性のかたまりなる業識が感ずるところをかくは申します。

無財餓鬼とは一切の食物を見ることがへ能はずして常に飢渴の苦を受くるもの世に一類の輩あり縱逸にして活業を營まず飲食に耽り色に荒み奢淫放逸肉慾の奴隸となる

凡て感覺の欲が一定の快樂を屢々すれば習慣となりついに病的となれば既に生ながら肉慾の餓鬼の業識と成りしと云も敢て不可でない。世に食欲慾等の惡弊症に陥りたる人はいふ、よしや死するも此こと計りは禁するに堪はずと是肉慾餓鬼の性格ではないか畜生、いか成るものが是畜生の業識と申すとならば人生は營養生殖の外に目的あるを知らず道德倫理もなく人と交りて仁恕もなく義務感情もなく横的情操横的行爲形は人類なれども其情操と行爲は動物に異ならず世の所謂人面獸心なるものなり。暴行虎の如きあり淫妖禽に類するあり既に人類に進化たる甲斐なく自ら性を畜生に安ずるは寔に淺ましいではありませぬか。上の三類は惡の性格と行爲の等によりて三品に分ちて之を三惡道と名づく。

**修羅** 無明の中に善なるもの三品あり中に下品なるものは修羅と云ひます人にして修羅的性格なる者とは世に謂ゆる天狗根性傲慢を以て其全精神を支配せるので經に憐賊鬪亂誠實なく尊貴自大にして己道ありと謂ふて横に威勢を行し人を侵易め自ら擧高して人の敬難を欲み天道を畏れず實に降伏すべきこと難し彼偽善偽徳を以て名を釣り權威を追ひ求め驕慢の爲の故に心意譚固休止なく斯る性格を修羅業識と名づく。

**人道** 人には仁義の常あり君臣父子等の經綸あり同情仁恕を以て相互に社交を濃にし良心あり義務感情あり個人は國家の一員なりと其職務を重じて人たるの義務を盡し天職を全うするは即ちこれ實の人なり全く人たるの義務を盡す時は人たるの權利を失ふことなし即ち是因果の理であります。

**天道** 天は公明正大博愛無私萬物を一仁の下に攝す。世に仁人君子あり國家人類の爲に己を犠牲にして世に幸福を施せる者皇國の仁徳帝の如き支那の堯舜禹王の類全く國民を子とし愛撫したまひたること是らば宜しく天道に配すべし。或は電氣又は蒸汽等を發明して天の機能を人類に紹介せしもの、如きは天使の作用なりまた楠公清原の如き國つ神と祀らる如き人類の常綸に超たる天道に屬するのであります。已上三類は善の行爲の三等によりて三善道と申します。

**聲聞** 先覺者の軌則に隨て得道するものを聲聞と云ふ。四諦とは苦集滅道にて苦とは生死は業に縛れたるの苦なり其本に煩惱である煩惱の本は即ち主我である。我を無にせる無我は宇宙真我と一體となりたるのである即ち天地同根となれば自然に神通を得て遠隔の地を見聞し他人の心を知り未來を豫言することを得。自心と宇宙の内容と一致してあれば心靈は無爲涅槃界に逍遙び而して肉體盡る時は一如の眞理に歸入す。釋尊の弟子舍利弗目連の如き聖者は悉くこれに攝す。

**緣覺** また獨覺とも云ひて獨り無師自然に悟る聖者である。十二因縁を觀して生死の源を悟り涅槃を得る生死の源は無明である之を覺れば業失ふ業力失へば生を受る勢力なし生ぜざれば老病死なし已に生死を脱すれば宇宙と一體である涅槃常樂の都である之を緣覺と云ふ。今古哲學者の如きは萬物の原因結果の理を究む即ち緣覺の學者いとふべし。聲縁二善は獨り自己の解脱を期して利他を兼す。

**菩薩** 智仁兼具り自ら誓て人を救ふ聖者なり智慧ありて宇宙の玄妙の理を契悟仁愛ありて宇宙の同情を以て人類を擔ふて度するに衆生の苦を我苦とし人を度せずば我も成佛せじとの情操と實行となり釋尊の未だ正覺を得たまはざりし時またキリスト・マホメットの類孔子ソクラテースの如き善導達摩の類吾國の空海源空等の聖者は悉く菩薩とす。すべて心靈更生して永恒の生命となりて人類を誘導する勇健なる仁人はみな之に屬す。

**佛陀** 前の菩薩の因位圓に果成を佛陀と名づく。法身報身應身の三身あり此世に出て釋尊として人格の身を以て人類を教化度脱し玉ひしは應身と云ひ最高等の清き處に在して相好圓滿の身光明遍く十方を照して一切の人類を攝取し靈化し玉ふを報身と云ひ天地萬物の實體として一大精神態にして萬物を現出する本源なるは法身である。佛陀は人類に對しては人の身なれども内面は宇宙の内面と一體に在ませり。已上四聖は聖靈態精神にして即靈格なり。

心靈覺醒たるものは聖者にて宇宙心と冥合し、涅槃界に安立し前三聖は覺醒たるも未だ圓滿ではない獨り佛陀のみ全く宇宙と同一體にして一方には極樂に安住してまた一面は分身を以て世界に出て度脱の作用をなすのである。

宗教の眞理は何の點にありやと云は各自の精神と其本源なる宇宙精神とを調和するにあり自己が小天地の小我とすれば宇宙は大我である此大我と小我が融合して大我の目的を我目的として眞理の終局に進むべき力行をなすが宗教の目的である。其大我の眞面目を悟りしは即ち教祖釋尊である否悟りしのみならず全く大我の化現である。

釋尊は其大我を『アミダ』と名くと曰へり譯すれば無量の光と永恒の壽の義即ち宇宙の眞體にして又一切心靈を開發し靈化するの靈能なり。問ふ何なる法を以て大我小我の調和を得べきや。答佛教に其方法多しと雖も最も簡易にして完全に調和をうるは佛陀三昧なり佛陀三昧とは大我なるアミダの聖名によりて其聖旨の我に現はれんことを祈りなば早晩如來の靈應が自己の心靈に感じこの一點の靈光に由て心靈の覺醒となる心靈開發すれば自己の心は全く如來の天真自性の中なることを悟る進んでは如來の内容なる金銀摩尼寶珠の宮殿七寶の莊嚴に最とも威嚴巍巍たる相好の如來に神聖正義智慧慈悲等の萬德を以て儼臨玉ふことを啓示さる。爰に至つて始めて完全なる宗教の關係を成したりと云ひます。

かゝる眞理を得てよりは宇宙の心を我心とし宇宙の眞理に參與りて得たる眞理を實踐躬行するが宗教の本旨にて而かも宇宙の目的は加はりたるものであります。

大正十五年二月二十日印刷  
 同 廿五日發行  
 誌代年七冊一圓二十錢(郵稅共)  
 年十二冊二圓(郵稅共)  
 編輯兼 山崎 辨成  
 發行人 山崎 辨成  
 東京市小石川區茗荷谷町九八  
 印刷人 小林 七太郎  
 東京市小石川區水道橋二ノ四四  
 發行所 ミオヤのひかり社  
 振替東京六六八五一番